



瑞穂

第34号

令和5年(2023)7月28日発行

発行

静岡県磐田市中泉168

静岡県立磐田農業高等学校同窓会事務局

TEL 0538-32-2161



アフリカでの経験が繋がる農業と地域活性化事業

体験学習農園キウイフルーツカントリー Japan 代表 平野 耕志(109回卒)



2005年度磐田農業高等学校生産科学科卒業。

在学中は、オーストラリアスコングラマー高校に1年間留学し、3年生では農業クラブ会長を務め、意見発表全国大会、文化生活部門において文部科学大臣賞を受賞しました。

卒業後は、東京農業大学短期大学部へ進み、20代前半はアメリカ農業研修に参加し、農業ビジネスを学びました。帰国後は故郷の掛川市のきれいな茶園が耕作放棄地に変わる姿や、同世代の農業従事者が農業から異業種へ転職していることから、日本の農業の活性化をどのようにしたらできるか模索していました。

その後、新しいアイディアの創出と自分の力を試すため、JICA海外協力隊でザンビア共和国へ赴任しました。農村地域へ野菜栽培技術を指導し、HIVや結核の予防啓発を行う事業のサポートを行いました。ザンビアでは栄養のバランスの偏りにより生活習慣病になる方が多く、野菜栽培の普及は必要不可欠です。農業は難病解決への深い関わりがあり、人のいのちに農業が直結している現場を実際に見てきました。農業の大切さを改めて学びました。

また、ザンビアでは畑の上で、髪を切ったり、食事をしたり、結婚式や教会として活用したりと、全てのことが畑の上で行われ、そこにコミュニティが生まれていました。「畑は耕す場所」であると共に、「人が楽しむ場所」と言う概念が日本では今必要であると感じ、それが一次産業の活性化に大きく繋がると考えました。

また、水や電気の供給が不安定な環境にいたことから、地域のザンビア人の友人と生活を共にすることは多くありました。そこでは子どもたちが平飼いしている鶏を捌き、ガスがない時は炭から火をつけて調理することが日常です。一方日本では、オール電化の影響もあり、火の熱さを知らない子どもたちが熱い炭を触ってしまい火傷したり、牛乳が牛からとれることを知らない子どもがいたりと、生活や食の物事の本質が薄れることに衝撃を受けました。このままでは世界規模で大きな災害が起きれば日本人は最初に死んでしまう!

そのようなことから、日本の一次産業活性化と若者の育成に関わることをしたいと考え、実家の農業を引き継ぐことを決めました。

当園は1976年から掛川市でキウイフルーツと野菜、茶を栽培する観光農園です。

栽培方法は地球に優しい循環型農法を行っております。循環型の特徴は農園内の森林にある湧き水を活用しています。ため池に貯水し、池の生物(魚やあひる、亀など)が肥料成分の高い水に生成してくれます。その水をソーラーシェアリングで作った電気でポンプを稼

働し(このソーラーシェアリングは磐田農業高校生と授業を通じて一緒に作成・研究中)、園内の丘の上にある別の貯水池に送り、園全体に重力を活用し灌水しています。この灌水で植物に吸収されない水は再度ため池に溜まる仕組みになっております。そのお陰で水を無駄にせず化学肥料も最小限で栽培をしています。

さらに収穫されお客様に食べてもらったあと皮は、農園の家畜(羊やウサギ、鶏)が食べ、その糞尿から肥料を生成しています。家畜が農園の除草を行い除草剤は一切使いません。

また農園では、倒木やキウイの剪定枝を活用し、焚火やBBQを行える場所があり、そのアクティビティから出る煙が農園の燃煙処理となり害虫予防に繋がります。そして燃えた後の灰は大切な肥料になります。

楽しさから農園や自然の大切さを伝えることを理念としています。

上記のような農園の仕組みを行いつつ、日本の若者を育成するため、掛川市の一次産業の活性化をはかる高校生向けの3泊4日の修学旅行を掛川市と実施しました。高校生が茶農家の課題解決に向けて、生産者や製茶工場、行政へインタビュー調査を行い、どのように解決できるかを、最終日にプレゼンテーションを関係者へ行いました。実際にいろいろな先進的な解決策を得ることができ、新しい魅力の気づきが受け入れ側のモチベーション向上にも繋がっています。例としては、畑の景観の素晴らしさをキャンプ場に活用する案などが実行に移され、好評を得ています。

東京や京都と並ぶ修学旅行の場所として見てもらえるような事業にしつつ、農村の魅力を再評価される仕組みに変えていきたいと考えています。

このような取り組みが、持続可能な世界構築に繋がる賞や著名人の視察に繋がっています。

・令和4年12月

静岡県の店舗デザイン賞でサステナブルデザイン受賞

・令和5年2月

全国宝物グランプリの観光と環境部門で準グランプリ受賞

・令和5年4月

マレーシア前首相 マハティール・ビン・モハマド来園視察

・令和5年5月

第1回JICA帰国隊員社会還元表彰 SDGs実践賞 受賞

「地球に優しく」を軸に一次産業が活性化できる仕組みを作ることに力を入れていきたいです。



国際化に対応できる人づくり



同窓会頭 69回卒 鈴木 勝

連日暑い日が続いておりますが、同窓会の皆様におかれましては、益々ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

就任以来、世界的な新型コロナウイルス流行の影響により、同窓会の会合はもとより生徒の海外交流事業も中止をせざるを得ませんでした。本年、202名の新入生を迎える「第129回の入学式」に参列をし、祝辞を述べさせて頂きました。私も昭和37年に入学をして、校訓である「品性を高し、労働を重んずる」の基、3年間、学生生活を過ごしました。昭和44年に、先輩である竹山祐太郎先生が県知事時代に地域の徳農家と言われる優れた農家を静岡県農業経営士に認定する制度を始めました。私も平成2年に認定番号223号(富士山)で農業経営士の活動が始まります。平成の時代も変革の時代で、磐田郡と周智郡の管内にある12のJAが平成4年に遠州中央として合併をしてスタートしています。



私も平成8年より役員として務めさせて頂きました。我が家も息子が中心になり、袋井東小学校のエリアで水田を60ha程管理している「田圃家穂波」を営んでいます。農業関係一筋の仕事ができたのも、この学校で

学んだことが基礎になっているからだと、思っています。

平成の初めの頃、WTOの自由貿易協定の最後の農業分野がウルグアイラウンドで妥結をしたのですが、コメが過剰にあり水田転作をする中、限定数量と言いながらも70万トンもの外米の輸入がはじまり、旧来の食糧管理法が廃止され新食糧法が施行されたことと農業経営基盤強化促進法や担い手確保のための認定農家制度を導入しても担い手が減少しています。静岡県内の水田で収穫できるコメの量が80万トンですから、かなりの量だと感じています。

「農は国の基」と言われるようにいかなる時代や環境になろうとも最も重要な産業は農業であります。その農業は、農業従事者が減少し高齢化が進んでいます。日本農業は個人経営、法人経営を問わず家族経営が98%ですから、後継者がいない限り農家は確実に減少します。一方、2050年には、世界の人口は、90億人を超える食料危機がいつ来てもおかしくない状況です。国連のFAO食料農業機関の調査によると慢性的な栄養不足に苦しむ飢餓の人は8億人を超し、地球規模での環境破壊が憂慮されています。それ故に、土に生き、地域の緑の美しい景観を守り、育てる担い手が必要であります。また国際的な視野を持って農業を見ることが求められています。海外教育協力会事業も生徒・職員をタイ王国相互交流事業として派遣する予定でしたが新型コロナ感染症の拡大状況に配慮し、代わりの事業として現地生徒との交流を図るためZOOMオンラインを利用して、希望者による交流会を2回ほど実施しました。

これから農業は、ITを始め大型機械やロボットを使った農業になり大きく変わっていきます。豊かな想像力や国際感覚、技術を身に付けた新しい時代を担うのにふさわしい人材が求められます。同窓会として協力できることはしていくつもりです。

裁判所長官をはじめ、農水、文科、国土、環境各大臣等が出席される中で行われ、学校の代表として賞状を賜る機会をいただきました。

2つ目は、「令和4年度静岡県地球温暖化防止活動知事褒賞」にて、地球温暖化防止普及・啓発部門学校等の部最高の栄誉である“知事表彰”を受けました。本校北東角のフェンス(アピタ磐田店方向)に掲げられた同窓会が作成した横断幕「127年間ずっとSDGs」ながら、本校が開学以来永続的に取り組んできた農業を通じた環境活動への貢献が評価されたことによる受賞です。

一方、残念なお知らせもあります。それは、多くの同窓生にとって記憶に残る行事の一つであった大日山演習林実習が、本年度をもって完全に幕を閉じることです。

これは、明治39年に静岡県と大日山金剛院との間で結ばれた100年間の分取林契約と幾度かの契約更新を経たうえで、今から13年前の更新の際に“平成37年(令和7年)3月31日を以て演習林を返還”とする最終契約が両者の間で結ばれたことによります。この判断には、県、大日山金剛院、学校、同窓会等、立場によって賛否や御意見の違いはあろうかと思います。しかし、多くの関係者が20年余の歳月をかけ、幾度となく重ねた議論の末至った結論です。その点については、尊重しなければなりません。とは言うものの、環境教育の重要性が説かれる現代において、大日山演習林の果たす役割はますます重要性を増すと思われただけに甚だ残念です。

本校はここ数年、前述の演習林返還に加え、天竜農場の閉鎖、農業会計の大幅な削減等、県の施策に基づき農業教育の在り方を見直し経営改善に努めてまいりました。近い将来には、校舎実習棟・プール体育館等施設設備の更新等も予想されます。

本校を取り巻く環境が如何に変わろうとも、農業教育を基盤とした専門高校の拠点校として、また地域や産業界の発展に貢献できる人材の育成機関として必要とされる学校であり続けられるよう、職員・生徒一同、自らの限界を定めずそれ以上の努力を尽くす所存です。

最後に、それぞれの地で御活躍されている同窓生の皆様の更なる御発展をお祈りするとともに、今後も本校への御支援、御協力をお願い申し上げます。

「瑞穂」に寄せる



校長 望月 久資

同窓生の皆様には、日ごろから本校の教育活動に対しまして、御理解と御支援をいただき、心より感謝申し上げます。

私、昨年の4月に、静岡県立磐田農業高等学校第29代校長として着任しました望月久資(もちづきひさし)です。よろしくお願いいたします。(同窓会誌「瑞穂」が隔年発行に変わり、御挨拶が1年遅れとなりました)本校での勤務は7年振り2度目になります。着任の折は、知己の先生方が数多く在籍されていたことから、母校に戻ってきたような安心感を抱いたことを覚えています。

磐田農業高校は、明治29年に中遠簡易農学校として創立され、本年で創立127周年を迎えました。その間、先輩諸氏の嘗々たる努力により、農業高校の王道を歩む学校として県内は元より、日本の農業高校の中でも確固たる地位を築いてきました。特に、第5代細田多次郎校長の時代には、愛知県の安城農林学校、新潟県の加茂農林学校と並んで日本の三大農学校と称されたほどです。

創立当時と現在では、日本の農業をはじめ本校の置かれた状況は大きく異なりますが、どんな時代になろうとも、常に校訓の「高品性・重労働」の教えを堅持すると共に、時代の要請に的確に対応できるよう変革も同時に進めて行かなければと考えています。

さて、昨年の着任以来、校長室にも様々な知らせが届いています。同窓生の皆様にも、この場を借りて御報告させていただきます。

1つ目は、「令和4年度 緑化推進運動功労者表彰記念」にて、本校が内閣総理大臣賞を受賞しました。これは、本校が長年にわたり農業教育を実践するとともに、市街地にある校内の樹木管理、花苗生産やバラ園の地域開放、市内の公園花壇等の管理や幼稚園・シニアクラブでの緑化交流活動等、磐田地域の方々と共に緑化を推進してきたことを高く評価いただいたことによるものです。表彰式は、天皇、皇后両陛下御臨席の下、三権の長の衆参両議長、内閣総理大臣、最高

大日山演習林

80回卒 鈴木 加津久



朝6時、起床の声で飛び起き境内で朝礼、1日が始まる。山林実習も今日で3日目、明日で終わりだ帰れる。

私は昭和49年畜産科に入学しました。

当時は夏休みに入るとすぐ3泊4日の山林実習が待っていました。先輩から大日山は「厳しいぞ」と聞いていましたが、3泊4日は長く、聞いていた通り厳しい実習でした。3日前の朝大井川鉄道の家山駅に集合し、お寺へ続く道をひたすら歩いて登っていくこと3時間の余、到着後休む間もなく大鎌を持って山に入り横1列並び「始め」の号令で斜面を登ったり下りたりの下草刈りが始まった。夏の山はムシムシしてすぐに汗びっしょりになってしまいます。これが3日間続きさすがに疲れました。唯一の楽しみはご飯と煮豆たっぷりの弁当でした。お寺の生活は2クラスが宿泊したので寝る時は1枚の敷布団を2人で使い、とても狭く疲れはとれない、寝返りをすれば隣の顔が目の前にあり、トイレに行けば寝場所がなくなる、「昼も夜も大日山は厳しい」と感じました。4日目今日は下山、弁当をいただき歩いて家山駅までの道のりは疲れもあり長く感じましたが、「大日山山林実習を体験して初めて磐

農生になる」と言い伝えられている実習が終わった喜びもありました。

私は今年65才になり完全退職となります、43年前縁あって磐田農高の職員となり山林実習を担当し今年で25年になります、この間、夏休みに実施していた3泊4日が、1学期中に1クラス単位で2泊3日になり、その後クラス親睦を兼ね4月中に1泊2日で実施するように変わっていきました。実習内容も下草刈りから枝打ち・間伐・作業道整備等が主となり、またクラス活動を取り入れた山林宿泊研修として令和元年まで実施しました。令和2年以降は新型コロナウイルスの蔓延により日帰り実習になってしましましたが、校訓に恥じないように山林実習を続けてきました。この伝統の実習も令和6年度に演習林契約が終了するため、明治39年から100年以上続いた山林実習が終わってしまうことは大変残念です。先輩方から受け継ぎ次へ渡すことができず申し訳ない気持ちでいっぱいです。長い間ご支援いただきました先輩方、並びにお世話になりました大日山金剛院の皆さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。



山門



山門から金剛院へ

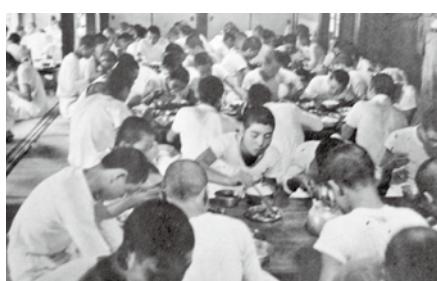


あづまや

昭和38年頃



大井川鉄道 家山駅



夕食のひととき



斜面草刈り

昭和51年頃



大日山研修センター



実習出発 諸注意 安間先生



現地での説明

学校生活



最後の大日山山村実習



農業鑑定競技会



体育大会



実習風景



ぶどうの生育調査



測量



田植え実習



メロンの整枝・誘引



羊の毛刈り



トウモロコシの生育調査

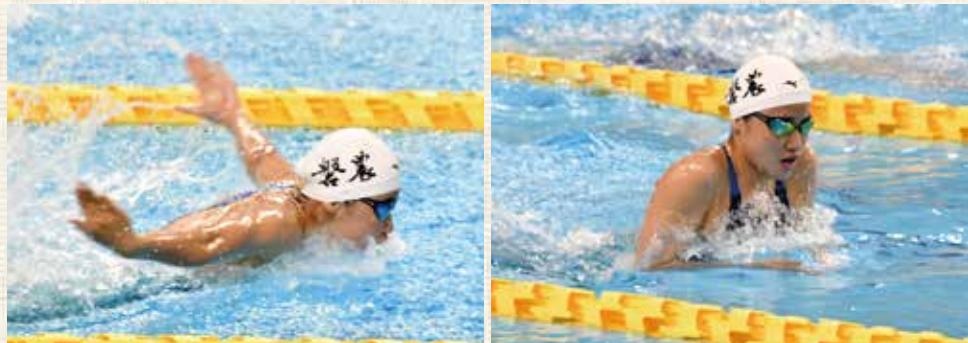


羊の散歩



食品加工

部 活



水泳部



馬術部



囲碁将棋部 (R5県大会出場 前田 騎士君)



ビジュアルアート部



陸上部



野球部



吹奏楽部

新同窓会員より

126回卒 梶 原 駿



磐田農業高校で過ごした3年間は、色々な経験ができ、悔いのない学校生活だったと感じています。私たちはこの3年間の経験を胸に、次なる進路へ羽ばたいていきます。私も高校で培ったことを大学で活かし、何事にも全力で取り組んでいきます。

私は生徒会長として磐田農業高校の行事を運営してきました。コロナ禍でしたが、体育祭や澄水祭の開催、中夜祭を数年ぶりに復活させることができ、うれしい気持ちで満ち溢れています。

私は高校に入学してすぐに、生徒会に入りました。理由として、中学生の頃に生徒会で活動する人たちの姿を見て憧れ、私も生徒会に入り、たくさんの行事の運営に関わっていきたいと思っていたからです。しかし、入りたての頃

は先輩の背中を追いかけることしかできず、先輩のような人になるのかと思うのと同時に、たくさんの人に認められるのだと意気込んでいました。それから、先輩に頼りながら多くのことを教わり、生徒会副会長になって、生徒会長の補佐としてサポートしてきました。そして、2年生の時、生徒会長の立候補者として、他の候補者との選挙を行い、生徒会長となりました。生徒会長という立場はとても重く、その重圧によって上手くいかない時や苦しい時がありました。それでもこうして、最後までやってこられたのは生徒会役員や友人、先生方の皆さんのおかげだと感じています。高校ではたくさんの経験ができました。楽しく幸せだった学校生活や友人との旅行、寝る間を惜しみ勉強等の経験を今後の人生に活かしていきたいです。

会長としての立場に誇りを持ち、その誇りを汚さないよう、次の進路でも何事にも全力で励んでいきます。

新同窓職員紹介

令和4年度より87回卒原田、101回卒有馬が母校で教鞭をふるっております。代表して原田よりご挨拶させていただきます。



「小さく見えることを大切に」

87回卒 原 田 恭 宏

「ふるさとは遠きにありて思ふもの」

令和3年度末の異動により、本校に赴任して2年目となりました。定年間近、最後の勤務地になるのは何処か。思いがけず、母校との

縁を深めることとなりました。

「離れているのが良い。磐田農業には、農業関係高校の目標として在って欲しい。」

奉職してから30余年、その距離感で来ただけに不思議な気持ちがします。

赴任から今まで、未だ慣れないことがあります。最も大切な授業では、己の未熟さを痛感する毎日です。それでも、嘘はつきたくない、その1点を心がけながら、日々の授業に臨んでいます。制服やカリキュラムは変われども、磐田農業はここにあります。後輩たちを見ながら、彼らは「高品性」「重労働」を気にかける時があるだろうか。

どんな思いで母校での生活を送っているのだろうかと考える時があります。

本校が創立されて127年。私の在学当時、農業高校は静岡県内に6校在りました。現在は本校を含めて3校となり、関係高校も含めて、多様な学習内容に対応しています。近年、時代が変化する中で「変わらず、そこに在るように見えるものは、本当は変化を繰り返している。」ということを耳にします。様々な人々の努力や思いが、本校の歴史を築いてきました。私には、今も母校があります。小さな変化を繋げたいと思います。よろしくお願いいたします。



現在、磐田農高に勤めている同窓生

教諭	鈴木 加津久	80回卒
教諭	原田 恭宏	87回卒
教諭	西尾 真一	88回卒
教諭	大場 雅之	95回卒
教諭	佐藤 一	97回卒

臨時実習助手	有馬 綾乃	101回卒
実習助手(育休中)	佐野 愛深	118回卒
非常勤嘱託員	川合 家嗣	68回卒
非常勤嘱託員	徳増 一太郎	73回卒

同窓会へご寄付をいただける場合は学校へご連絡下さい。（書面やお電話でのご案内は現在行っておりません。）

同窓会役員名簿

平和を願う日

農場の生産科学棟の近く、丸山みかん園の一郭に「平和の願い」の碑が本校100周年を迎えた平成8年5月19日に建立されました。これは戦争の犠牲者となった5人の生徒を慰靈すると共に平和を願うため、当時の同級生が中心となり基金を募り建てた慰靈碑です。そして、この碑文に次のような当時の惨状が記されています。

第二次世界大戦中の昭和20年5月19日午前、米国空軍B29爆撃機約90機は関東・東海領域に侵入した。密雲のため飛行場及び軍需工場の攻撃目標を発見できず、各地に散発的に投弾した。

この日、生徒達の一部は勤労動員に一部は学校実習に分かれ、それぞれの場所で作業に汗を流していた。10時50分空襲警報発令、各所で作業中の生徒達は、近くの防空壕に避難した。飛来する米軍機は猛爆の雨を降らせ、空は黒く風はよどみ、相次ぐ爆音不気味な落下音は続いた。

11時13分校内に落弾した5発の内の一発は、至近弾となり丸山茶園南側の防空壕、前方わずか5メートルに落下した。身を伏す瞬間炸裂した弾片爆風は容赦なく壕内を襲った。悲惨極まりない壕内の惨状はただ絶句するのみ。一蓮托生5人の学友は、一朝にして幽明境を異にした。罪なき若い命をも奪う無謀な戦争のもたらす無慈悲な凶行に非憤慨を覚えざるをえない。

将来を嘱望する我が子を失った遺族の悲嘆を察すると、涙を流し哀悼せざるを得ない。亡き友を偲ぶ中、慰靈碑建立の機運高まり殉難者の冥福を祈ると共に恒久の平和と母校の発展を祈念し、この碑を建つ。

慰靈碑「碑文」の抜粋



53回卒 鈴木 巖氏



役職名	回数	氏名	進
顧問	57	藤森	勝
会	69	鈴木	寅
	68	場	平
	68	太	隆
	69	奥	彦
	69	星	明
	70	河	
理	70	酒	
	73	原	
	75	加	
	77	根	
	80	神	
	91	大	
監	69	鈴	一
	69	木	広
	76	島	子
		雪	子
		嶋	弘
		川	雄
		雪	昇
関伊	東豆	支部長	亘
		〃	樹
駿富	東御殿	〃	
清庵	東吉原	68	秀
	(庵原清水)	〃	藤
静志	岡太原	68	正
棟大	須賀	54	和
大菊	須賀	76	民
掛春	東浜岡	62	敦
	小笠川	73	将
	野	71	夫
	森	76	潔
	田井	73	男
	竜羽	68	治
	田	73	彦
	洋岡	69	剛
	山	69	剛
	間窪	66	
	北南	77	
	西松	77	
	佐西	72	
	米	78	
		70	
		60	
		63	
		56	
		大箸	之
		(アルゼンチン在住)	

編集後記

同窓会報「瑞穂34号」を無事発行する事が出来ました。これも同窓会皆様の御協力の賜物と関係各位に心から感謝申し上げます。

本同窓会は、令和4年に125回卒197名、令和5年に126回卒190名を迎え入れ22,130名となりました。今後も母校発展のため同窓会皆様方の御支援と御協力をお願いいたします。

前号より今号までの大多数の期間はコロナ禍であったため各支部の皆さんの活動もままならなかつたかと思います。そこで今回は終了する大日山演習林の特集と現在の学校の様子を中心に編集させていただきました。

この号が発行される頃にはアフターコロナの世界になっており、同窓会、各支部の活動もより一層活発になっていくことを祈願しております。

また同窓会では、弔電を打たせていただいております。ご連絡をお願いいたします。